



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

安全保障上の脅威に対処するに肝要なもの

— 吉田松陰の「幽囚録」に学ぶ —

前田 秀一郎

一昨年(2021年)の年末に中国の武漢で発生した新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に全世界に広まった。この迅速な感染拡大は、人や物が地球規模で往来し影響し合う現代の世界様体に起因する。さらには軍事技術の革新によって、各国は安全保障上の新たな脅威に曝(さら)されてゐる。殊に我が国は中国やロシア、北朝鮮にどう対処するかが喫緊の課題となつてゐる。

そこで、幕末期、軍事力を背景に開国を迫る欧米列強から、国の独立をどう守るかを思索し行動した兵学者の吉田松陰の思想を、その著である「幽囚録」から読み取り、外からの脅威に対処するに肝要なものは何かを考へてみたい。

吉田松陰は安政元年(一八五四)、下田沖のアメリカ軍艦に乗り込み海外渡航を企てたが、失敗して萩に送られた。その獄中で「幽囚録」を

書いて、密航を企てた理由を認めてゐる。その序に、「吾微賤なりと雖も亦皇國の民なり、深く理勢(世の情勢)の然る(二衰一盛ある)所以(ゆゑ)を知らば、義として身家を顧惜(こくせき)し、然坐視(ぜんざし)して皇恩に報ずることを思はざるに忍びず、然らば則ち吾の航海(あつち)豈(あや)已むことを得むや、今、事蹶(つた)き計敗れ、退きて圖(りう)を按じ筆(ふで)を弄して空論高議する者と流(りゅう)を同じうす、何の羞恥(はづか)かこれに尚(な)む」とある。

国家の非常時に際会して、一介の皇國の民に過ぎないが、その務めを果たすべく、欧米列強の実情を視察しようとして、已むなく渡航禁止の令を犯した。今は囚はれ身となつて空論を叫び弄ぶ者と同じ身の上となつた。これ以上の恥辱はない、としつつも、松陰は眼前の危機にどう向き合ふべきかを次のやうに述べてゐる。

今のわが国は、膝を屈し首を

低(た)れて、欧米列強の為す所に任せ(まか)せてゐるが、歴史を緋(ひもと)けば、上世の天皇は武威で外国を恐れさせ、慈しみ深い御心で外国人を愛された。その英圖雄略(えいとうゆうりやく)(優れて雄大な計略)は永遠に光り輝いてゐる。そして外国の長所を採用してわが国の短所を補ひ、わが国に無いものを外国から輸入された。この広やかで大なる思召しは、後世の我々が規範とすべき所である。鎖国は衰へた世に幕府が採つた二時逃れの策だ。欧米の先進技術を取り入れ、国力の強化を図ることこそ今の急務ではないか。兵学校を設立して洋式軍事訓練を行ひ、外国語科で欧米諸国の原著による講義をし、俊才を外国に派遣して、學術を修得させるべきである。

松陰は、わが国のあるべき姿を、古代の天皇方が英圖雄略(えいとうゆうりやく)によつて四方を統治される「皇國」に見出し、自身を皇恩を蒙る「皇國の民」とした。数多(た)の藩の臣民が、万世系(ばんせいけい)の天皇を元首に戴く皇國の民であると自覚するやうになれば、尊厳ある統一国家として列強と等しく対峙(たいし)できるはずだとした。

さらに「幽囚録」の末尾に、「延喜式」の祈年祭(しのひのまつり)(稲の豊穰、御代の繁栄と国土の平安を祈る祭儀)の祝詞(のりと)を掲げてゐる。その祝詞の中

に「天神の敷(す)き坐(ま)す嶋(しま)の八十嶋(やそじやま)は、谷(たに)蟻(あま)のさ(さ)度(た)る極(きま)め、鹽(しほ)沫(うた)の留(とど)まる限(かぎ)、狭(せま)國(くに)は廣(ひろ)く、峻(たけ)國(くに)は平(ひら)けく嶋(しま)の八十嶋(やそじやま)墜(お)つる事(こと)なく」云々の二節(ふたぶし)がある。その意味は、神様の下にある数多くの島々は、蟻蛙(あまがは)が跳び渡つて行く「地の果て」や、海水の泡(うた) (鹽沫)の留まる「海の果て」までも、狭い國は広くし峻(たけ)しい國は平らかにして、どの島も漏れ落ちることなく(神様が天皇様にお授けなさる)とならう。また「荷前(おほまへ)は皇(すめ)大(おほ)御(み)神(かみ)の大前(おほまへ)に、横山(よこやま)の如(ごと)く打ち積(た)み置(お)きて、殘(のこ)りは平(ひら)けく聞(き)し看(み)さむ」との二節(ふたぶし)もある。意味は、諸國から献上される貢物の初物(初物) (荷前)を山の如く(荷前)に積んで奉り、その残りを天皇様が安らかに召し上げられ、さらに万民に下し置かれるであらう」となる。

この祝詞に「皇國の大体(本質)」を見出した松陰にとつて、皇恩に報ずるとは、この祝詞が示す麗しい國柄(くにがら)を守り抜くことであつた。

現代では「安全保障の強化」と言へば、法整備や兵器調達、外交の重要性などばかりが論じられる。しかし、自國の歴史を回顧して、そこから浮び来る國柄(くにがら)を守り抜く決意と信念とが何よりも肝要であることを、松陰は我々に教へてゐるのである。(山梨大学名誉教授)